

種目No	器種	地区	遺跡名	口径	底径	器高	調整	出土	色調	焼成	残存率	備考
第51図5	蓋	-	包含層	4.0	(15.0)	5.9		産 砂粒含む	2.5YR7/6 黄	良好	25%	
第51図6	器台	E5	包含層 (24.0)	-	(16.0)	外)七ボキ		産	10YR8/4 黄灰緑	良好	40%	
第51図7	器台	C3	包含層 (12.7)	(13.7)	12.6	内)ハケ		産	2.5YR7/4 赤赤黄	良好	70%	円孔有り
第51図8	器台	E7	包含層 9.8	(13.0)	8.15	外)七ボキ 内)ケツ		産	2.5YR7/6 黄	良好	60%	
第51図9	器台	E5-6	包含層 (8.1)	-	(6.4)			産	2.5YR8/4 黄灰緑	良好	40%	
第51図10	器台	C3	包含層 (8.0)	(6.6)	6.0	外)七ボキ 内)ハケ		産	5YR6/6 黄	良好	60%	
第51図11	器台	D2	包含層 7.4	-	(5.2)	内)ケツ		産	10YR8/4 黄灰緑	良好	80%	円孔有り
第51図12	器台	F5	包含層 (8.8)	(10.2)	8.8	内)ハケ		産	10YR8/3 黄灰緑	良好	50%	円孔有り
第51図13	器台	F5	包含層 7.7	(10.8)	8.0	外)七ボキ 内)ハケ		産	5YR5/6 赤赤黄	良好	60%	円孔有り
第51図14	鉢	F6	包含層 (16.1)	1.2	7.4	外)ハケ 内)ハケ		産	2.5YR7/4 赤赤黄	良好	35%	底部穿孔有り
第51図15	鉢	E9	包含層 (10.6)	(6.8)	5.8			産 砂粒含む	2.5YR8/3 黄灰緑	良好	30%	台付
第51図16	鉢	E7	包含層 (11.9)	(5.1)	6.8			産 砂粒含む	2.5YR8/5 黄灰緑	良好	50%	台付
第51図17	鉢	G5	包含層 (9.2)	-	5.1	調整面跡のみ不明		産	2.5YR7/4 赤赤黄	良好	90%	
第51図18	鉢	-	包含層 11.7	-	7.3	外)ハケ 内)七ボキ		産	2.5YR7/6 黄	良好	90%	
第51図19	二重口鉢蓋	-	包含層 (50.0)	-	(15.7)	外)竹葉文 ハケ		産	5YR7/6 黄	良好	10%	
第51図20	ヒコチュア土器	E5	包含層 4.4	2.5	3.9			産	2.5YR8/4 黄灰緑	良好	70%	
第51図21	ヒコチュア土器	-	包含層 3.7	2.6	2.6			産	2.5YR8/4 黄灰緑	良好	100%	

第2節 石器〔図版第17、第52図、第6・7表〕

I 構成と分布

I区下層調査で出土した石器は、総数で47点を数える(第6表)。器種内訳は石鏃、削器、打製石斧、磨製石斧、石錘、敲石、凹石、磨石などである。用途別に見ると、狩猟具・漁撈具・工具・土掘具・調理具等があり、少量だが多様な道具類がある。

石材は安山岩が8割弱で、チャートや砂岩も見られる。器種別では、石鏃や削器・剥片にチャートが多く、他の器種は安山岩が主で、砂岩も用いられる。

出土状況はC-H-3~12区にかけて、大半が包含層から出土した。D-F-6~8区でややまとまるが、全体的に散在する。また、器種別に分布が偏る状況も見られなかった。

II 石器の形態

石鏃(第52図1・2) 1は凹基有茎鏃、2は凹基無茎鏃である。ともに両面調整を施すが、1は表面中央に、2は表裏中央に素材面を残す。1は長三角形を、2は側縁が緩く彎曲して、ずんぐりした形状を呈する。

石錘(同図3) 有溝石錘で、紡錘形を呈する。長軸方向に4条、短軸方向に7条の溝が作出される。

打製石斧(同図4) 薄手の板状剥片を素材とし、周辺中心に調整を施す。側面の中程に抉入を持ち、分銅形を呈する。また、側辺下半が大きく彎曲し、丸い刃部を持つ。

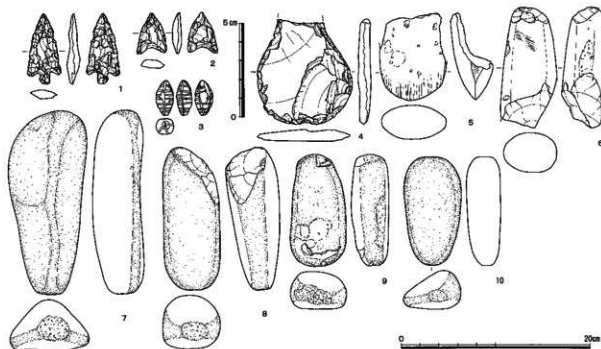
磨製石斧(同図5・6) 5は側辺に不明瞭な稜が作出され、断面が丸みを持つ。刃部に擦痕が見られる。6は基部が細く、乳棒形を呈し、断面は楕円形である。左右側面に潰れが見られる。

敲石(同図7~10) いずれも棒状礫が素材だが、断面は7と10が三角形、8と9が方形を呈する。8以外は上下端に敲打痕を持つ。また、9は裏面下半にも敲打痕を持つ。

Ⅲ 小結

石材構成は、チャートが2割強を占め、石礮や剥片等に用いられている。九頭竜川上流域の遺跡では良質な安山岩が用いられ、チャートは1割以下の例が多い。本遺跡の石材構成は、同じ九頭竜川流域で近在する福井市法土寺遺跡と類似している。

石器の生産地については、各器種の大半が単独個体であることから、他所から搬入され、周辺で使用・廃棄されたものと考えられる。所産時期については、有茎礮があることや、打製石斧や磨製石斧・蔽石の組成に占める割合が高いことから、縄文時代後～晩期が主体時期と推定されるが、石礮等の後出資料が少量混在している可能性も考えられる。



第52図 石器実測図(縮尺1/4、1～3のみ1/2)

第6表 石器組成表

石材	石礮	削器	剥片	打斧	磨斧	石礮	蔽石	凹石	磨石	計
安山岩	1		3	12	3		5	1	11	36
チャート	1	1	4							6
砂岩						1	2		2	5
計	2	1	7	12	3	1	7	1	13	47

第7表 石器観察表(最大長・最大幅・厚さはmm、重量はg)

標図No.	器種	地区	出土遺構	石材	最大長	最大幅	厚さ	重量	備考
第52図1	石礮	F4	井戸4上層	チャート	38.0	18.0	7	3.0	凹基有茎礮
第52図2	石礮	F7	土坑137	安山岩	22.0	16.0	5	2.0	凹基無茎礮
第52図3	石礮	E6	包含層	砂岩	37.0	19.0	17	10.0	有溝石礮
第52図4	打製石斧	E7	包含層	安山岩	111.8	101.7	14	170.2	分銅形
第52図5	磨製石斧	J11	包含層	安山岩	93.0	71.0	45	206.4	刃部のみ
第52図6	磨製石斧	E3	溝44	安山岩	128.1	60.0	46	468.8	刃部欠
第52図7	蔽石	H7	包含層	安山岩	196.1	84.0	55	1132.8	
第52図8	蔽石	C5	包含層	砂岩	152.8	61.0	58	771.3	
第52図9	蔽石	P6	包含層	安山岩	119.7	60.0	40	438.5	
第52図10	蔽石	D7	包含層	安山岩	116.5	62.0	42	403.0	

第3節 玉作り関連遺物〔図版第17・18、第53・54図、第6～11表〕

I 構成と分布

I区下層調査で出土した玉作り関連遺物は、総数で209点を数える。内訳は、管玉69点、ガラス小玉21点、白玉27点、勾玉9点、垂玉・小玉・算盤玉各1点、未成品28点、剥片・チップ等52点である。出土地区はC-H-4～12区とL-24・25区にかけて、遺構覆土と包含層とはほぼ同程度に出土した。ただし、これら出土品の大半は土壌洗浄により検出したため、遺構出土品で出土状況の判明しているものはない。器種別に分布が偏る状況も特に見られず、全体的に散在する傾向にある。以下、概略を記すが、個々の遺物の詳細は観察表を参照されたい。

II 玉作り関連遺物の形態

管玉（第53図1～26） 細形や太形ものが混在し、24～26のような大型品も存在する。総じて丁寧に仕上げられており、表面に研磨痕はほとんど確認できない。24は外面調整が粗く、丸みを帯び、上下面の孔径が大きく異なるなど、他の管玉とは異質であるが、これは仕上げ研磨や孔さらえの済んでいない未成品と見なすこともできる。穿孔については、両面・片面のものがそれぞれ存在するが、片面穿孔と判断したものや、穿孔方向を確認できなかったものの中には、両面の孔径がほぼ同じものがあり、これらは両面穿孔の際の段差を孔さらえて整えている可能性がある。石材は緑色凝灰岩が主である。

ガラス小玉（同図27～42） すべてに気泡の点が見られ、27・30・35・41では、孔方向に伸長する気泡筋や気泡列が確認できる。これらは熔かしたガラスを管状に引き伸ばし、截断した後に再加熱して成形をする、管切り技法を用いて製作されたと考えられる。

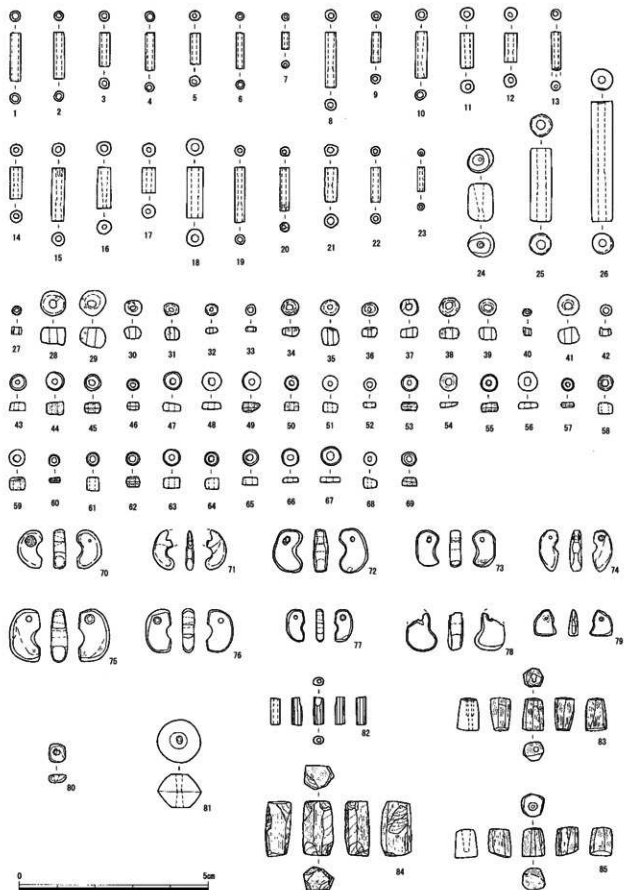
白玉（同図43～69） 側面・上下面に研磨痕を確認できるものがある。61は直径より長さが上回るが、他の白玉と比べて、法量や材質にさほどの差異は認められないため、白玉と判断する。石材はすべて滑石である。

勾玉（同図70～78） 71は丸みを帯びた半環形、73は空豆形を呈し、それ以外は半球形を呈する。全体によく研磨されている。孔は73を除いて、片面から穿孔されており、孔内は円錐形を呈する。73の両面の孔径には大きな差がなく、孔内は円柱形を呈する。穿孔方向は不明である。石材は74・76が翡翠で、ほかは断定できないが、石質や色調などいずれも多種多様な石材を使用している。

その他の玉類（同図79～81） 79は垂玉である。よく研磨されており、光沢を帯びる。片面から穿孔される。石材は翡翠である。80は小玉である。平面は隅丸長方形を呈し、中心からやや長辺側へずれた位置に穿孔される。石材は翡翠である。81は算盤玉である。非常に丁寧に研磨されており、光沢を帯びる。平面は真円に近い円形を呈し、側面は滑らかな曲面である。中心からややずれた位置に、両面から穿孔される。石材は瑪瑙である。

未成品（第53図82～85、第54図） 管玉製作工程の各段階における未成品と見られる。石材はすべて緑色凝灰岩である。

第53図82～85は研磨・穿孔段階のものである。82は多角柱形を呈する。穿孔されており、孔は貫通している。表面に明瞭な研磨痕を視認出来ないため、仕上げ研磨段階と判断する。83～85は側面が歪な6～8角形に整形されており、全面に研磨痕が残る。83は穿孔されているが、中央の孔は貫通せず、中央より若干ずれた位置に、中央の孔より径の小さな孔が再度穿たれ、貫通している。84は未穿孔である。一部に剥離痕がある。85は穿孔途中である。83と85の孔径は大きく、太形の完成品が想定される。

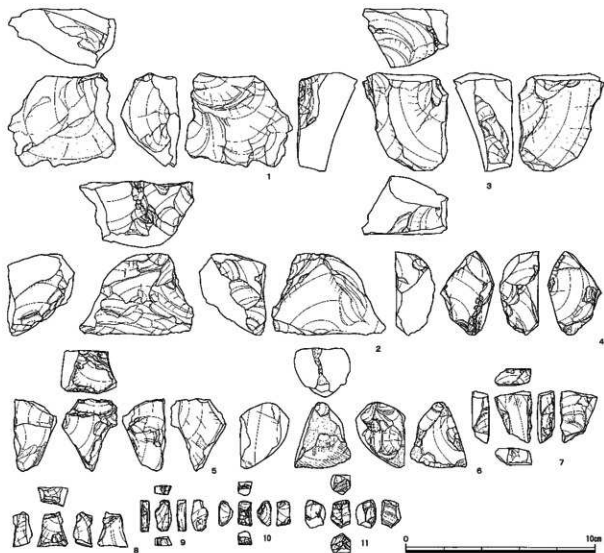


第53図 玉作り関連遺物実測図(1) (縮尺1/1)

第54図1～3は荒削段階のものである。1・2は寸詰まりな大形厚手の剥片で、素材の縁辺が多く残る。1は上端と右側辺、2は両側辺に裏面と直交する面を持つ。3は大形厚手の板状剥片で、左側辺に素材の縁辺が残る。上下端や右側辺に表裏と直交する面を持つ。

同図4～8は形削段階のものである。4～6は平面が幅広の角形で、断面は台形を呈する。下端以外に面を持つが、両側辺は平行せず、器体に凹凸や反りが残る。また、6は上端が表裏方向、表面下半が斜行と長軸方向に研磨される。7・8は平面が幅広の角柱形を呈する。両側辺がほぼ平行し、下端にも面が作出される。7は右側面が調整されるが、下端面と左側面に凹凸が残る。8は両側面が緩く彎曲する。

同図9～11は調整段階のものである。各面がほぼ平行・直交し、整った細長の角柱形を呈する。器体の凹凸や反りを除去するように、9は上下端面と左側面、10は上下端面と表面が調整される。また、11は上端面と裏面を研磨後、上下端面が調整される。



第54図 玉作り関連遺物実測図(2) (縮尺1/2)

III 小結

I区下層では多彩な玉類が出土しており、中には算盤玉のように、県下でもあまり例がないもの¹も見られる。しかし、玉類の出土数に比べて、未成品や素材など製作工程をうかがわせる遺物は非常に少ない。土壌洗浄を相当量実施したが、玉鋸や玉錐などの玉作り工具も、微細な破片がわずかに得られたのみであった。加えて、工作ビット等の施設を有する遺構も検出されていないことを考慮すると、当地区で玉作りが日常のかつ継続的に営まれていた可能性は低いものと推測される。

利用石材に関しては、管玉や白玉がほぼ一種類の石材に偏っているのに対し、勾玉や算盤玉などは、多種多様であると言うより、石質や色調が特徴的な石材をあえて選択している様子がうかがえる。その形状も特殊であることから、管玉や白玉などは異なる価値観に基づいて製作された状況が推測される。

最後に、未成品について若干付記する。本県坂井市下屋敷遺跡における管玉製作工程（富山1988）を見ると、管玉の穿孔は円柱に近い多角柱形に整形された後におこなわれ、最後に仕上げ研磨を施している。あらためて本遺跡の資料を見ると、第53図82は横断面がやや楕円形に近いが、円柱に近い外形を呈する段階で穿孔されている。しかし、同図83・85は、7ないし8角柱形に粗く整形された段階で穿孔されている²。側面に広い平坦面を残したほうが、玉をより固定しやすかったとすれば、この段階で外面調整をあえて止めたという可能性も指摘できよう。また、同図83～85には押圧剥離痕が見られず、研磨痕のみが残される。押圧剥離痕が磨り消されたとも考えられるが、直径が大きい段階で全面に研磨痕を残していることから、研磨のみで整形されている可能性が高い³。

なお、詳細は今後報告予定であるが、大規模な墳墓群が検出されたII区下層調査においても、玉類が出土している。今回の資料はII区下層出土資料を検討する段階で、改めて再検証する必要がある。

註

- 1 県下では、敦賀市吉河遺跡で、砂岩製の算盤形石製品と算盤形土製品が出土している。ただし、その大きさは本遺跡出土の算盤玉とはかけ離れて大型である。
- 2 県下では、あわら市伊井遺跡で、8角柱形に整形された管玉未成品に、穿孔工具の補助穿孔を残す例が報告されている（橋本・鈴木1996）が、当該資料は玉體製で、石材に適した手法を探った可能性もあり、単純に本遺跡の類例と見なすのは難しい。
- 3 形削を施溝打撃分割、調整を研磨のみによって行う技法は、滋賀県大中の湖南遺跡をはじめとする琵琶湖周辺以西に多く見られ、大中の湖南技法と呼ばれる。本遺跡では形削以前の段階の製作工程が不明であるが、調整段階ではこの技法と共通する特徴を持つと考えられる。なお、北陸地方では、施溝打撃分割の後、押圧剥離の工程を経て研磨に入る、新技法が多く見られるが、同地域でも技法の混在が見られるようである（寺村2004）。形削後の調整に押圧剥離を用いず、研磨のみによっておこなう例は、県下では下屋敷遺跡のほか、大野市石近次郎西川遺跡などで見られる。

参考文献

- 中司照世 編 1989 『吉河遺跡発掘調査概報』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報2 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明 1988 『第V章 5 管玉製作工程について』『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第14集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 57～61頁
- 橋本幸久・鈴木篤英 1995 『第1章 2 伊井遺跡』『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～5年度』金津町教育委員会 11～40頁
- 青木隆佳 編 2002 『石近次郎西川遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第58集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 寺村光晴 1980 『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 2004 『日本玉作大観』吉川弘文館
- 大田区立郷土歴史博物館 編 2002 『ものづくりの考古学 ー原始・古代の人々の知恵と工夫ー』
- 福海貴子・橋本正博・宮田明 編 2003 『八日市地方遺跡1』小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県小松市教育委員会

第8表 管玉観察表

検体No.	器種	地区	出土遺構	遺存状態	最大径 (mm)	最大径 (mm)	最大孔径 (mm)	重量 (g)	穿孔 方向	石材	色調	備考
第5301	管玉	D7	井戸2	完形	12.60	2.75	1.80	0.15	不明	緑色結核岩	黄緑	
第5302	管玉	F4	井戸4	完形	12.35	2.90	1.60	0.16	両面	緑色結核岩	緑	
第5303	管玉	F7	土坑233	完形	8.95	2.70	1.45	0.09	片面	不明	緑	
第5304	管玉	E8	土坑238	完形	9.80	2.40	1.55	0.04	片面	緑色結核岩	黄緑	
第5305	管玉	D6	土坑261	完形	8.15	2.75	1.45	0.10	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5306	管玉	B2	土坑288	完形	9.60	2.10	1.35	0.06	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5307	管玉	E・F5	p661	完形	4.60	2.00	1.05	0.03	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5308	管玉	D6	p651	完形	14.40	3.00	1.50	0.21	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5309	管玉	F9	p699	完形	8.00	2.55	1.25	0.07	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5310	管玉	C5	包含層	完形	12.20	3.05	1.70	0.16	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5311	管玉	C7	包含層	完形	9.15	3.65	1.65	0.20	片面	緑色結核岩	緑	
第5312	管玉	D6	包含層	完形	7.80	3.50	1.45	0.17	両面	不明	灰青	
第5313	管玉	D7	包含層	破損	(9.90)	2.65	1.35	0.12	片面	緑色結核岩	黄緑	
第5314	管玉	D8	包含層	完形	8.20	3.05	1.45	0.12	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5315	管玉	E7	包含層	完形	14.10	3.50	1.75	0.28	両面	緑色結核岩	緑+白濁	
第5316	管玉	E7	包含層	完形	11.05	3.85	1.90	0.23	両面	緑色結核岩	緑	
第5317	管玉	E8	包含層	完形	6.95	3.60	1.30	0.16	不明	緑色結核岩	黄緑	
第5318	管玉	E8	包含層	完形	13.65	4.50	2.05	0.41	片面	不明	灰青	
第5319	管玉	E8	包含層	完形	14.75	2.75	1.45	0.14	両面	緑色結核岩	緑+白濁	
第5320	管玉	E8	包含層	ほぼ完形	11.55	2.45	1.30	0.08	不明	緑色結核岩	黄緑	
第5321	管玉	E10	包含層	完形	9.05	3.55	1.95	0.21	両面	緑色結核岩	緑	
第5322	管玉	F4	包含層	完形	9.10	4.80	1.30	0.10	不明	緑色結核岩	緑	
第5323	管玉	F11	包含層	完形	6.35	1.95	1.00	0.04	片面	緑色結核岩	緑	
第5324	管玉	—	—	完形	10.00	6.70	3.00	0.46	両面	緑色結核岩	黄緑	表面凹凸、丸み磨び、未確認。
第5325	管玉	C6	p664	完形	19.35	5.70	2.25	0.60	両面	緑色結核岩	黄緑	
第5326	管玉	L24	包含層	完形	31.85	5.70	1.90	1.12	両面	緑色結核岩	黄緑	

第9表 ガラス小玉観察表

検体No.	器種	地区	出土遺構	遺存状態	最大径 (mm)	最大径 (mm)	最大孔径 (mm)	重量 (g)	成形法	材質	色調	気泡	透明度	備考
第5327	小玉	D8	溝32	完形	1.85	2.70	1.10	0.02	管切	ガラス	青緑	気泡列	普通	
第5328	小玉	M24	p437	ほぼ完形	4.80	6.90	2.10	0.29	管切	ガラス	青	点在	普通	亀裂入る。
第5329	小玉	F8	p472	完形	5.10	6.95	2.30	0.32	管切	ガラス	黄緑	点在	低い	
第5330	小玉	F7	p453	完形	3.10	4.80	1.60	0.08	管切	ガラス	青	気泡高	高い	
第5331	小玉	E8	p596	完形	3.30	4.05	1.25	0.06	管切	ガラス	青	点在	普通	亀化、やや色くすむ。
第5332	小玉	B・C4	包含層	完形	1.85	3.15	0.95	0.02	管切	ガラス	青緑	点在	高い	
第5333	小玉	C・D6	包含層	完形	1.15	2.75	1.55	0.02	管切	ガラス	淡緑	点在	高い	
第5334	小玉	D4	包含層	完形	2.60	4.70	2.00	0.07	管切	ガラス	青緑	点在	高い	
第5335	小玉	D8	包含層	完形	5.00	4.90	1.50	0.11	管切	ガラス	青緑	気泡列	低い	色くすむ。
第5336	小玉	D・E9	包含層	完形	2.70	4.15	1.30	0.05	管切	ガラス	青	点在	高い	
第5337	小玉	F9	包含層	完形	2.90	4.65	2.05	0.08	管切	ガラス	紺	点在	普通	表面凹凸、亀裂入る。
第5338	小玉	E7	包含層	完形	3.10	5.20	1.90	0.10	管切	ガラス	青	点在	普通	
第5339	小玉	E7	包含層	完形	3.15	4.80	2.30	0.08	管切	ガラス	青	点在	普通	
第5340	小玉	E10	包含層	完形	2.15	2.20	1.80	0.01	管切	ガラス	青緑	点在	普通	表面凹凸、やや色くすむ。
第5341	小玉	F9	包含層	完形	4.35	6.80	2.00	0.18	管切	ガラス	紺	気泡列	高い	
第5342	小玉	—	—	完形	2.05	3.15	1.50	0.02	管切	ガラス	淡緑	点在	高い	

第10表 白玉観察表

検体No.	器種	地区	出土遺構	遺存状態	最大径 (mm)	最大径 (mm)	最大孔径 (mm)	重量 (g)	穿孔 方向	石材	色調	備考
第5343	白玉	F・G9	建物9p1	完形	2.25	4.30	1.05	0.07	不明	滑石	暗灰濁	
第5344	白玉	E5	溝35	完形	3.25	4.90	1.50	0.13	不明	滑石	灰	
第5345	白玉	C4	溝51	完形	2.90	4.20	1.85	0.07	不明	滑石	黒灰	側面に線を有する。
第5346	白玉	F9	土坑213	完形	2.15	3.30	1.30	0.04	不明	滑石	黒灰	側面に線を有する。
第5347	白玉	E7	土坑247	完形	2.30	4.95	1.70	0.09	不明	滑石	青灰	側面丸み磨び。
第5348	白玉	C6	土坑259	完形	2.00	5.10	1.70	0.08	不明	滑石	青灰	
第5349	白玉	C6	土坑259	ほぼ完形	2.70	5.60	1.90	0.09	不明	滑石	青灰	
第5350	白玉	D1	土坑272	完形	2.20	3.90	1.30	0.06	不明	滑石	青灰	
第5351	白玉	C5	土坑402	完形	2.80	4.15	1.30	0.06	不明	滑石	灰黒濁	
第5352	白玉	C6	土坑402	完形	1.55	3.35	1.50	0.03	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。
第5353	白玉	C6	土坑402	完形	2.50	4.25	1.30	0.08	不明	滑石	暗灰濁	側面に線を有する。
第5354	白玉	E7・8	住居1土坑	完形	1.25	4.75	1.65	0.04	不明	滑石	青灰	
第5355	白玉	E7・8	住居1土坑	完形	2.45	4.35	1.50	0.08	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。
第5356	白玉	E10	p378	ほぼ完形	1.60	5.10	1.90	0.06	不明	滑石	青灰	
第5357	白玉	E7	p605	完形	1.45	3.30	1.35	0.02	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。
第5358	白玉	C6	p672	完形	3.10	4.05	1.95	0.08	不明	滑石	青灰	
第5359	白玉	E1	p724	ほぼ完形	3.45	4.25	2.05	0.09	不明	滑石	青灰	
第5360	白玉	C5	包含層	完形	1.60	3.05	1.25	0.02	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。
第5361	白玉	C5	包含層	完形	3.80	3.50	1.65	0.08	片面	滑石	青灰	
第5362	白玉	C5	包含層	完形	2.80	3.50	1.55	0.04	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。
第5363	白玉	E5	包含層	完形	2.90	4.50	1.60	0.10	不明	滑石	青灰	
第5364	白玉	E7	包含層	完形	3.20	3.85	1.70	0.07	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。
第5365	白玉	E8	包含層	完形	2.05	4.10	1.70	0.05	不明	滑石	黒灰	側面に線を有する。
第5366	白玉	E8	包含層	完形	1.30	4.45	1.55	0.04	不明	滑石	緑灰	
第5367	白玉	—	—	完形	1.75	5.10	2.10	0.07	不明	滑石	青灰	側面丸み磨び。
第5368	白玉	—	—	完形	2.90	3.60	1.30	0.05	不明	滑石	灰濁	
第5369	白玉	—	—	完形	2.20	4.00	1.95	0.05	不明	滑石	青灰	側面に線を有する。

第11表 勾玉観察表

標記No.	器種 器式	地区	出土遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大孔径 (mm)	両面距離 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	穿孔方向	石材			備考
												色調	光沢	透明度	
第53図70	勾玉 半球形	F4	井戸4	完形	10.25	6.45	3.00	5.00	3.10	0.33	片面	緑色	不明	低い	裏の削い-磨痕 あり。
第53図71	勾玉 盤形	F10	土坑128	破損	10.25	5.50	—	3.80	2.15	(0.14)	不明	緑色	不明	低い	
第53図72	勾玉 半球形	H14	土坑410	完形	11.80	7.80	2.35	5.60	3.80	0.51	片面	不明	不明	高い	
第53図73	勾玉 梨豆形	E7	p600	完形	9.60	5.95	1.00	5.00	3.00	0.31	不明	濃赤茶	不明	無し	
第53図74	勾玉 半球形	E7	p600	完形	11.00	5.00	1.70	4.05	3.15	0.30	片面	淡黄白	不明	低い	
第53図75	勾玉 半球形	D6	包含層	完形	14.05	7.95	2.40	6.70	4.20	0.74	片面	緑+白緑	磨痕 有り	普通	
第53図76	勾玉 半球形	E10	包含層	完形	11.85	6.80	2.05	5.50	3.20	0.49	片面	緑+白緑	磨痕 有り	普通	
第53図77	勾玉 半球形	F7	包含層	完形	8.60	4.60	1.15	3.95	2.00	0.19	片面	緑+白緑	不明	有り	無し
第53図78	勾玉 半球形	—	包含層	破損	10.05	8.10	—	6.05	—	(0.40)	片面	不明	赤茶+黄土 や中有り	低い	

第12表 その他の玉類観察表

標記No.	器種	地区	出土遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大孔径 (mm)	両面距離 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	穿孔方向	石材			備考
												色調	光沢	透明度	
第53図79	垂玉	E6	p667	完形	7.00	5.95	1.40	5.00	2.65	0.16	片面	緑色	不明	低い	
第53図80	小玉	B4-C4	包含層	完形	2.20	4.95	1.05	—	—	0.08	片面	濃赤茶	不明	有り	片面形は 購入品方形。
第53図81	算盤玉	E7	包含層	完形	8.90	11.40	2.05	—	—	1.32	両面	オレンツ	磨痕 有り	低い	

第13表 未成品観察表

標記No.	段階	地区	出土遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大孔径 (mm)	重量 (g)	穿孔 方向	石材	色調	備考
第54図82	研磨・穿孔	F4	井戸4	完形	7.15	2.75	1.25	0.07	不明	緑色緑灰岩	緑	穿孔前、多角柱。
第54図83	研磨・穿孔	E10-11	土坑64	完形	8.45	5.60	2.30	0.31	不明	緑色緑灰岩	黄緑	片面孔重傷、研磨痕残る。7角柱状。
第54図84	研磨・穿孔	D7	包含層	完形	14.45	8.00	—	1.17	—	緑色緑灰岩	緑	片面孔、研磨痕残る。6角柱状。
第54図85	研磨・穿孔	M25	土坑453	完形	7.50	6.00	2.30	0.42	—	緑色緑灰岩	黄緑	穿孔途中、研磨痕残る。8角柱状。
第54図86	荒削	G15	土坑2	—	50.00	57.00	—	62.00	—	緑色緑灰岩	黄緑+茶褐色	
第54図87	荒削	I9	p930	—	44.00	61.00	—	87.00	—	緑色緑灰岩	黄緑+茶褐色	
第54図88	荒削	H8	包含層	—	53.00	45.00	—	64.00	—	緑色緑灰岩	緑+白緑	
第54図89	形削	L24	包含層	—	37.00	43.00	—	23.00	—	緑色緑灰岩	黄緑+茶褐色	
第54図90	形削	D9	土坑204	—	39.00	30.00	—	22.00	—	緑色緑灰岩	緑灰	
第54図91	形削	G12	p125	—	36.00	30.00	—	25.00	—	緑色緑灰岩	緑灰	
第54図92	形削	E11	土坑111	—	29.00	20.00	—	6.00	—	緑色緑灰岩	黄緑	
第54図93	形削	G10	土坑281	—	19.00	16.00	—	3.00	—	緑色緑灰岩	黄緑+茶褐色	
第54図94	調ね	E7	包含層	—	17.00	9.00	—	1.00	—	緑色緑灰岩	緑灰	
第54図95	調ね	E5	包含層	—	14.00	7.00	—	1.00	—	緑色緑灰岩	緑	
第54図96	調ね	E8	包含層	—	15.00	10.00	—	2.00	—	緑色緑灰岩	黄緑	

第6章 まとめ

第1節 遺跡〔第9・10図、第14表〕

I区下層調査で出土した遺物は、そのほぼすべてが弥生時代および古墳時代の遺物である。その所属時期は弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅を有し、特に弥生時代終末から古墳時代初頭までの遺物が主体を占める。検出した遺構の時期幅や集落の主体時期も、大筋においてはこの傾向に一致するものと判断される。

本節ではI区下層調査での検出遺構のうち、特に主体を占める掘立柱建物と墓（周溝墓・土坑墓）について検証する。ただし、本成果は、今後報告予定のII・III区下層調査成果とともに、あらためて評価すべきと考えられるので、基本的には概要の評価と今後の課題の把握程度にとどめる。なお、遺構の規模や方位に関する数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概算値である。

I 掘立柱建物

(1) 構造と規模

掘立柱建物¹のうち、柱穴の配列（桁行×梁行）を把握できるものは11棟で、全て側柱建物である。内訳は2×1間が8棟（建物4・7・8・9・10・12・15・21）、3×1間が3棟（建物11・13・14²）で、桁行・梁行ともに複数の柱穴を有する建物は目下確認されていない。

最も規模が大きいのは建物14で、建物面積³（桁行長×梁間長）は2294㎡を測る。最も規模が小さいのは建物21で、建物面積は786㎡を測る。さらに、3×1間建物は全体の中でも最大の部類を占めているが、2×1間建物の建物面積は、8棟中6棟が10.00～12.00㎡前後に収まり、最大の建物10（15.36㎡）でも、3×1間建物で最小の建物13（18.72㎡）より小規模である。総じて、3×1間建物のほうが2×1間建物より大型傾向にあるとも言えるが、客観的に見れば、本遺跡の建物はいずれも小規模な部類に属し、小型の建物が林立する状況であったと推測される。

(2) 方位と分布

22棟全ての建物で桁行の方位を測定し得た。これら建物の方位については、方位の近似する群⁴として、次の3群に大別できる。ただし、建物22・23は他の建物と位置が隔絶しているため、除外した。

A群：建物1・2・3・12・16・20・21

B群：建物4・7・9・11・13・14・15・18・19

C群：建物6・8・10・17

一般に、位置が重複しない複数の建物の方位が一致もしくは近似する場合、それらが同時期に併存して、建物群を形成していた状況が推定される⁵。さらに本遺跡の場合、建物3－建物4（A-B）、建物7・9－建物8（B-C）、建物12－建物13（A-B）、建物16－建物17（A-C）について、各群の建物の位置が相互に重複しており、各群それぞれに時期差が存在する可能性を指摘できる。

建物の分布については、A群はI区-①東端部および②に分布が集中し、B群は①を中心に広範囲な分布を示す。C群は建物数が少ないせいか、全体に散漫な分布で、特記すべき傾向は認められない。

無論、建物2・3（A群）や建物18・19（B群）など、同群の中でも位置が重複する例や、さらに別個の建物群が潜在する可能性など、なお留意せねばならない点も多いが、基本的に築造時期の異なる建物群が複数存在したという状況は、十分に想定できるものと考えられる。

(3) 築造時期

建物の築造時期は、出土遺物や他遺構との先後関係などもあわせて検討する必要がある。しかし、I区の場合、遺構の密集・重複状況から類推して、当時から遺構間で覆土が頻繁かつ複雑に攪乱されていたことは明白である。特に建物の柱穴や土坑・ピットなど小規模な遺構では、出土遺物や覆土の混乱はなお著しく、把握できた成果は実際にわずかであった。そのわずかな成果のうち、比較的良好な出土遺物が得られた建物14と、井戸3との先後関係が明確な建物10について、築造時期を検証してみる。

まず、建物14出土遺物（第43図6～10）は、いずれも弥生時代終末に属すると見られ、建物14の築造時期は弥生時代終末以後と判断できる。次に、建物10は布掘が井戸3に切り込まれており、布掘覆土遺物が井戸覆土にある程度混入したことが予測される。そこで井戸3出土遺物（第44図1～5）を概観すると、1～4は弥生時代終末に、5は古墳時代初頭に属すると見られ、井戸3の築造時期は古墳時代初頭以降と判断できる。さらに1～4と5との時期差を勘案すれば、1～4は布掘覆土からの混入と見なすのが妥当であり、よって建物10は弥生時代終末以前の築造と結論付けられる。

これら以外の建物の築造時期は不明であるが、井戸も生活遺構であることを考慮すれば、井戸3と他の建物が同時期に併存していた状況も十分想定される。結論として、少なくとも弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、複数の建物群が時期を違えて変遷していたものと推測できよう。

(4) 小結

建物の検証で推測し得たのは、小規模の建物が主体を成すこと、建物群が複数存在すること、少なくとも集落の主体期間にかけては、複数の建物群が時期ごとに変遷していたこと、の3点である。ただし、特にI区-①については、周溝墓や土坑墓も検出されており、それらを主体とする墓域との先後関係が重要となるが、詳細は次項で考察する。

最後に、建物の性格について述べると、いわゆる高床式建物（高倉）の特徴に合致する属性が多く見受けられる⁶。無論、住居である可能性も排除はしないが、建物の上部構造を示す物証が全くない現状では、明快な結論は下せない。ただ、住居群にせよ、倉庫群にせよ、これら建物は日常生活に関わる構造物であり、当区が集落内での居住域として活用されていたことは確かであろう。

第14表 掘立柱建物属性一覧表

遺構名	地区	構造	柱穴掘り方	桁×梁(間)	桁行×梁間(m)	建物面積(m ²)	方位(桁行)	群	備考	棟目No.
建物1	F-G14～15	銅柱	方形ピット	27×1	7×4.40	—	N23°W	A	周溝墓2に後行。	第13区
建物2	F13～14	不明	方形ピット	2×?	3.32×?	—	N65°E	A	南桁行のみ。	第13区
建物3	F13～14	銅柱	布掘	37×1	7×2.60	—	N19°W	A	やや斜めに歪む。	第13区
建物4	F13～14	銅柱	方形ピット	2×1	3.32×3.06	10.16	N10°W	B		第14区
建物6	E-F12～13	不明	方形ピット	2×?	3.24×?	—	N37°E	C	北西桁行のみ	第14区
建物7	G-H9～10	銅柱	方形ピット	2×1	4.00×3.04	12.16	N5°W	B		第14区
建物8	G9～10	銅柱	方形ピット	2×1	3.80×2.92	11.1	N53°W	C		第15区
建物9	F-G9～10	銅柱	方形ピット	2×1	3.32×3.36	11.16	N88°E	B		第15区
建物10	F-G6～7	銅柱	布掘	2×1	5.12×3.00	15.36	N44°E	C	井戸3に先行。	第16区
建物11	G-H5～6	銅柱	方形ピット	3×1	5.36×3.96	21.23	N87°E	B		第16区
建物12	E-F6～7	銅柱	方形ピット	2×1	3.72×3.12	11.61	N32°W	A		第17区
建物13	E-F6～7	銅柱	方形ピット	3×1	4.68×4.00	18.72	N82°E	B		第17区
建物14	E-F4～5	銅柱	布掘	3×1	5.12×4.48	22.94	N1°E	B	3×2間?	第18区
建物15	C-D2～3	銅柱	方形ピット	2×1	3.28×3.56	11.68	N79°E	B		第18区
建物16	H-113～15	銅柱	布掘	37×1	7×2.66	—	N58°E	A	やや斜めにずれるか。	第19区
建物17	H-114～15	不明	布掘	不明	—	—	N45°W	C	1条のみ。	第19区
建物18	H-112～13	不明	方形ピット	2×?	4.08×?	—	N81°E	B	北桁行のみ。	第19区
建物19	H13	不明	布掘	2×?	3.60×?	—	N82°E	B	北桁行のみ。	第19区
建物20	K-L11～12	銅柱	布掘	37×1	5.04×3.28	16.53	N23°W	A		第19区
建物21	J9～10	銅柱	方形ピット	2×1	3.22×2.44	7.86	N76°E	A		第20区
建物22	L24～25	不明	布掘	不明	—	—	EW	B	北桁行のみ。	第20区
建物23	L23～24	不明	布掘	不明	—	—	N66°W	C	1条のみ。柱痕不明瞭。	第20区

※建物6は欠番。桁行・梁間の長さ、面積、方位の数値はすべて概算値もしくは推定値。

II 墓

I区-①では周溝墓⁷2基と、土坑墓と見られる遺構が多数検出され、集落内で墓域を構成するものと考えられる。本項では墓域の構成内容を検証し、前項で確認した居住域との先後関係を推論する。

(1) 構成

墓単体の規模から、周溝墓は首長層の墓、土坑墓は一般民衆層の墓とそれぞれ見なせよう。周溝墓に群を形成する状況はうかがえず、一時的な築造と考えられる。一方、土坑墓は調査区に至る所に多数密集している状態だが、当然ながら一時的な築造とは考えにくい。基本的には、大小様々な集塊単位の土坑墓群が、墓域内の各所で繰り返し築造されたと解釈すべきであろう。したがって、I区-①に展開していた墓域は、複数の土坑墓群で構成される一般民衆層の共同墓地が主体であり、周溝墓はある一時期に首長層の墓地として築造されたが、比較的短期間のうちに途絶した、と推定される。

(2) 居住域との先後関係

弥生・古墳時代の集落では、居住域と墓域とは明確に分離されるのが通常であり、同時期に近接する事例というのは稀である。本遺跡においても、建物群（居住域）と周溝墓・土坑墓群（墓域）は同時期には併存しなかった、と判断するのが妥当であろう。

周溝墓と建物群の時期差は、遺構覆土の切り合い（第12図）によって、周溝墓2→建物1という先後関係が判明しているため、周溝墓の廃絶後に建物群が築造された状況が推測される。

一方、土坑墓群と建物群の時期差は、切り合いによる先後関係の明らかな事例はなく、出土遺物についても建物同様、築造時期の指標として積極的に評価はできない。ただ、集落内での土地に対する意識の問題として見た場合、一度墓域として廃絶され、居住域へ移行した区域が、再度墓域に回帰するという変遷は非常に想定しがたい。ならば、すでに確認したように、この墓域が土坑墓群主体である以上は、その地域概念自体も土坑墓群を主体として形成されたものと判断すべきであろう。そして、先後・併存関係はともあれ、周溝墓はその概念を共有する、同じ墓域の構成要素として築造されたものと考えられる。したがって、周溝墓・土坑墓群→建物群、という先後関係が想定され、I区-①では墓域の廃絶後に居住域へ移行したという変遷が読み取れる。

第2節 予察

前節では遺構の検証を通じて、大筋として土坑墓群主体の墓域から、小規模な掘立柱建物群主体の居住域への変遷が想定されることを推論した。本節では、当時の中角集落の動態を考察し、今後予定されるⅡ区下層調査報告への予察としたい。

当時の中角集落は九頭竜川の自然堤防上に展開していたと推定されるが、自然堤防の推定範囲（第6図）を見ると、I区付近は自然堤防の幅が極端に狭まる部分に相当する。一方、その北東側にある、現在の中角町街地に相当する一帯は非常に広範で、居住するには絶好の立地条件であったと考えられる。当時の集落の本体は、この一帯を中心に展開していたと見なして間違いはあるまい。

そこで、I区の各区割の状況を再確認してみると、まず、I区-④の東半部は現在の街地に最も近く、集落本体の西端部、つまり、集落の出入口部分に接している。次に、I区-④の西半部と③の東端部は、自然堤防に伴う後背湿地と考えられるが、この付近はI区でも最も幅の狭い区間で、集落本体とI区をつなぐ通路のような地形であったと推測される。そして、I区-③の大半と①・②からは、徐々に堤防の幅が広がり、Ⅱ区につながっている。

要するに、I区以西は地形的に集落本体から分離した区域と考えられる。居住域と墓域を明確に分離する、という意味合いからすれば、I区に墓域が形成されたのは、ごく自然な成り行きであったかも知れない。そして、墓域は居住域に付随する区域であるから、I区における墓域から居住域への変遷は、当時の集落本体の情勢にも深く関わっていることが推測される。今回推論し得た事象については、集落内の単なる一事ではなく、集落全体に関わる大きな事象の一面として捉える必要があろう。

冒頭でも述べたように、本章での推論はI区下層調査成果に対する中間意見であり、最終的にはII・III区下層調査成果⁸⁾とも総合して、結論を出すことになる。今後予定するII・III区下層調査報告では、本書での検討内容も含め、あらためて遺跡全体として検証を加え、当時の集落の実像を明らかにしていきたい。

証

- 1 本書中で報告する掘立柱建物は、すべて現地調査中に抽出・設定し、現地の遺構の状況も逐一検証しつつ、最終的に建物と判断できたものである。しかし、方形の掘り方を持つ柱穴は他にも数多くあり、未確認の建物のある可能性は非常に高い。
- 2 第4章で指摘したように、建物14は3×2間の可能性もあるが、現状で断定はできないので、ここでは3×1間としておく。
- 3 今日では、複数階を含めた建物の延べ床面積を指す(庇など除く)概念および用語であるが、本項の場合、基本的に平屋構造の建物という想定のもとに、建物の規模を示す指標として、便宜的に使用している。
- 4 建物の長軸・短軸の区別なく、平面図上での見ただけで分類したため、建物自体の向き(桁行と梁間の別)などは考慮していない。各群内での建物の方位の振れ幅は、おおむね10°~20°程度の範囲内に収まる。
- 5 無論、方位のみで建物の同時性がすべて保証されるわけではないことは、後述する同一群内での建物位置の重複例を見ても明らかである。建物の方位と同時性については、あくまで一般論であり、ある程度普遍的に捉えられている傾向と理解された。
- 6 高床式建物は弥生時代に出現した掘立柱建物の一種で、西日本から北陸地方および東海地方にかけて広く分布し、遺構数も非常に多い。平面的な特徴としては、梁間が1間に限られ、桁行は1~3間のものが多いが、それ以上の例もある。ただし、「桁行柱間3間以上の例は必ずしも高床式とは限らない。(中略)梁間1間の寸法が3mを越し、かつ、桁行の長い例は丘陵上の遺構に多く、低湿地の遺構には梁間の狭い例が多い。また、高床を支える床板の長さや技術的な限度を考慮すると、一般的に高床式建物の梁間は2m前後のものが多いと思われる」(宮本1997 22頁)といった宮本の見解からすると、本遺跡の建物には、必ずしも高床式建物の特徴に合致しない部分もかなり見受けられる。
- 7 「周溝墓」を含め、墳丘を伴う墓の呼称には「古墳」や「墳丘墓」などがあるが、それぞれの厳密な定義はまだ確立されていないのが現状である。これらの形態や規模、築造技術等には本質的に差が見られず、用語として適当でないとの指摘は、従来から様々な形でなされており(春成1985、都出1986、田代1996など)、例えば、時代区分を重視するならば、形態は同じ方形で周溝を伴う墓でも、所属時期が弥生時代以前ならば「方形周溝墓」、古墳時代以後ならば「方墳」と、各々区別することにもなる。第3章でも注釈を付したように、今回報告する2基を「周溝墓」と呼称するのは、あくまで編者個人の便宜によるものである。
- 8 本書では詳述しないが、例えばII区下層調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて造営された、前方後方墳1基を含む、大小40基以上の周溝墓などで構成される、大規模な墓群が検出されている。I区で墓域から居住域への変遷が想定される一方、II区で大規模な墓域が長期間にわたり存続していること、また、I区の墓域は土坑墓主体で、首長墓は途絶しているのに対し、II区の墓域は首長墓主体と見られることなど、状況は一対照的であり、両者の関連性が注目される。

参考文献

- 宮本長二郎 1986 「5 住居」『岩波講座 日本考古学 4 集落と祭祀』岩波書店 175~216頁
 宮本長二郎 1997 「2 住居と倉庫」『弥生文化の研究 7 弥生集落』雄山閣出版 9~23頁
 藤田等 1966 「III 弥生時代の生活と社会 4 埋葬」『日本の考古学 III 弥生時代』河出書房新社 300~326頁
 春成秀爾 1985 「弥生時代畿内の親族構成」『国立歴史民俗博物館研究報告 第5集』1~47頁
 都出比呂志 1986 「6 墳墓」『岩波講座 日本考古学 4 集落と祭祀』岩波書店 217~267頁
 田代克己 1996 「9 墓地 6.方形周溝墓」『弥生文化の研究 8 祭と墓と装い』雄山閣出版 127~131頁

写 真 图 版



(1) 遺跡遠景 (南より)



(2) I区-①東半部 (東より)



(3) I区-①西半部 (北より)



(1) I区-②全景(北より)



(2) I区-③全景(南より)



(3) I区-④全景(南より)